

世界の資料館から(3) アイルランドの資料館

山 田 朋 美

本稿ではアイルランドの資料館を紹介する。アイルランドには国立公文書館(The National Archives of Ireland)、国立図書館(The National Library of Ireland)に加え、大学や様々な協会・宗教団体が運営する図書館や資料館が存在する。国の規模から推察されるとおり、アイルランドの資料館は小規模なものが多いが、そのぶんどこもフレンドリーな雰囲気である。年々資料館の制度化・効率化が進んできてはいるものの、日本の資料館に比べ融通が効くところもいまだ多い。スタッフも少人数なところがほとんどで、1週間も通うとすっかり顔見知りになり、ジョークを交わすようになるほどだ。このように、アイルランドの資料館はどこかのんびりとした雰囲気があるのだが、その一方で、これまでこの国の資料館を取り巻いてきた状況は決して優しいものではなかった。内戦により多くの資料が失われたほか、不況による影響も深刻であった。本稿ではこうした歴史も踏まえながら、アイルランド国立公文書館を紹介したい。

現在のアイルランド国立公文書館は、ダブリンの目抜き通りであるグラフトンストリート(Grafton Street)から徒歩で10分程のビショップストリート(Bishop Street)に位置する。国家文書局(The State Paper Office)とアイルランド公文書館(The Public Record Office of Ireland)を引き継ぐ形で1988年1月に設立され、現在の建物には1992年に移ってきた。国立公文書館には、その前身の2館が所蔵していた文書に加え、作成されてから30年以上経過した各省庁の資料が収められている。

アイルランド国立公文書館の前身の一つであり1867年に設置されたアイルランド公文書館は、かつてはフォー・コート(The Four Courts Buildings)に置かれ、行政や司法関連の文書を所蔵していた。しかし、1922年に勃発

した内戦でこの公文書館は破壊されてしまう。1921年12月にイギリスとの独立戦争を終結させるための英愛条約が締結され、アイルランドがイギリス帝国内の自治領となることが認められたが、それに反対する勢力が1922年4月にフォー・コートを占拠し、ここを軍事拠点とした。それに伴い、同館も内戦の舞台となってしまう。反対派を排除しようとする自由国軍の攻撃により、フォー・コートは激しく破壊され、13世紀以来保管されてきた貴重な資料の多くが焼失・散逸した。この出来事がアイルランド史研究に与えた影響は計り知れない。その後も、同館は、アルスターの6州がアイルランド自由国からの離脱を決定した際には当該地域の資料を手放すことになったり、1986年に国立公文書館法(The National Archives Act)が発効されるまでは、整備不足や専門スタッフの不足に悩まされたりしてきた。近年では、深刻な経済危機の影響で、国立公文書館のアイルランド国立図書館への統合が提案されたこともあった。こうした状況に危機感を感じた研究者らにより2010年には‘Archives in Crisis’というシンポジウムも開催されている。

このように、小国故か時の政治・経済の影響を顕著に受けてきたが、アイルランド国立公文書館はアイルランド研究者、特に現代史を専門とする者にとって主要な資料収集の場の一つである。一部の資料を除きデジタル化はほぼ進んでおらず、インターネットでカタログを検索はできるものの、記載漏れがあったり、カタログ上では存在することになっている資料が見当たらないこともあったりと不便なことも少なくはないが、問題に直面する度に、スタッフが全力で力を貸してくれるのは非常に心強い。また、同館は、研究者以外の利用者も多い。19世紀および20世紀初頭の

国勢調査の結果や家系図も収められているため、毎年夏になると、世界中のアイランド系の人々が、ファミリー・ヒストリーを辿りにやってくる。僅かな記録から、先祖達の人生に思いを馳せている彼らの姿を見ると、こ

の決して大きくはない公文書館が、様々な困難に耐えながら、過去と現在だけではなく、現代のアイランドと世界各地を繋いでいるのだと実感する。

(本研究所研究員)